

A Voyage to Arcturus David Lindsay



紀田順一郎 荒俣宏

目次

学学大系文学大系 28 B



スへの旅 D・リンゼイ

下 荒俣宏 訳

A Voyage to Arcturus: David Lindsay

国書刊行会

世界幻想文学大系 責任編集 紀田順一郎＋荒俣宏
第二八巻B

アルクトゥルスへの旅——下

昭和五五年二月二〇日印刷 昭和五五年二月二五月初版第一刷発行

著者——デヴィッド・リンゼイ

訳者——荒俣宏

発行者——佐藤今朝夫 発行所——株式会社国書刊行会

東京都豊島区巢鴨三―五―一八 郵便番号一七〇 電話〇三―九一七―八二八七 振替東京五―六五二〇九

造本——杉浦康平＋鈴木一誌 本文挿画——渡辺富士雄

印刷——セイユウ写真印刷株式会社 製本——大口製本印刷株式会社

定価——二、二〇〇円

●——落丁本・乱丁本はおとりかえします

荒俣宏あらまたひろし

一九四七年、東京都生まれ。

慶応大学卒。

専攻、英米幻想文学。

主要著訳書——

『別世界通信』月刊ペン社、

一九七七年。

『世界幻想作家事典』

国書刊行会、一九七九年。

『ダンセイニ幻想小説集』

創土社、一九七二年。

『ラヴクラフト全集』

創土社、一九七五年。

マクドナルド『リリス』

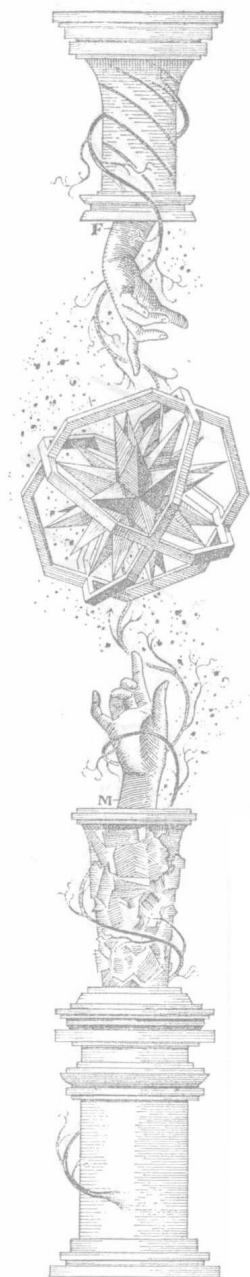
月刊ペン社、一九七六年。

H・G・ウェルズ他

『魔法のお店』奇想天外社、

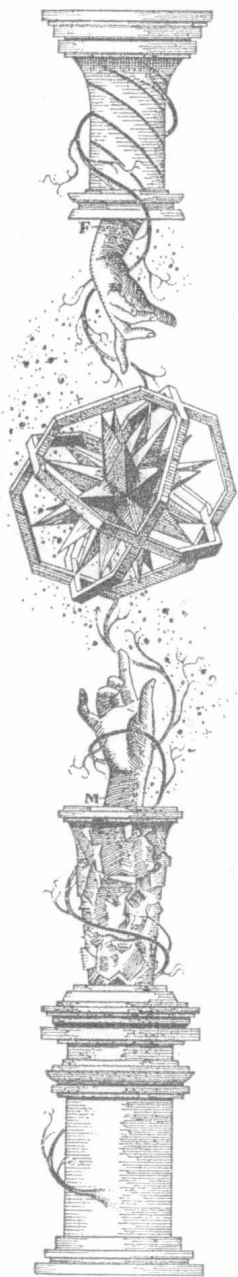
一九七九年。







アルクトウルスへの旅——
D・リンゼイ——
荒俣宏 訳



目次



アルクトゥルスへの旅——下 D・リンゼイ

第一—十二章は上巻

8 ——— 第十三章——ウームフラッシュユ森

18 ——— 第十四章——ボールクラブ

46 ——— 第十五章——スウェイローンの島

80 ——— 第十六章——リーホールフィ

112 — 第十七章 — コーパング

148 — 第十八章 — ホーント

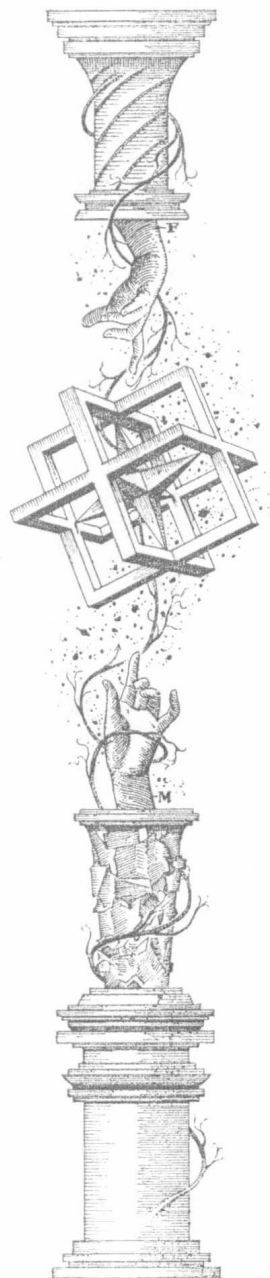
184 — 第十九章 — サレンボード

216 — 第二十章 — ベイリ

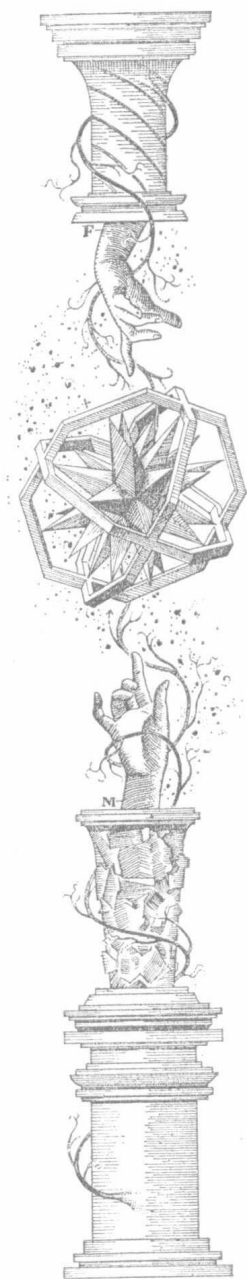
248 — 第二十一章 — マスベル

265 — 「アルクトゥルス」への旅 — 荒俣宏

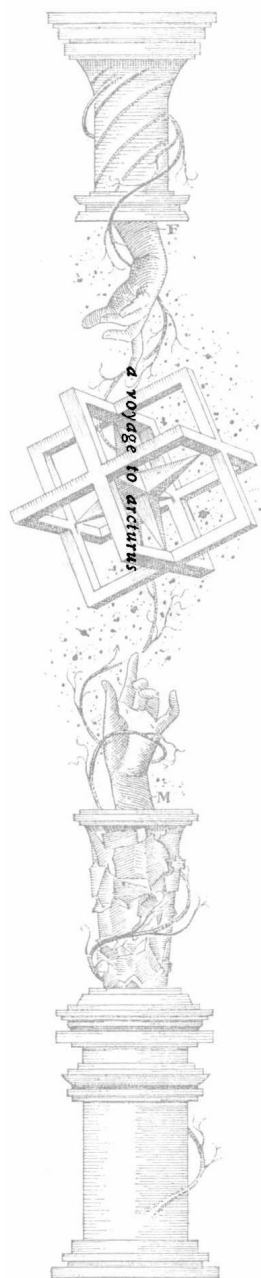




アルクトウルスへの旅——下



第十三章——ウームフラッシュ・森



目が醒めて、トーマンスでの第三日めを迎えた。手足が痛かった。かれは脇を下にして横たわり、夢うつつの心地で周囲を眺めていた。森は夜のようにだったが、夜といっても、夜明けが今まさに訪れようとするころの、物が見えるというよりも気配が感じられるようになる時刻の夜に、似ていた。家のように大きな、人騒がせな物影が二つ、三つ、薄明のなかに浮かびでた。仰向けに寝返りを打って跳ね起き、上方へ目をやると、ようやく、その影が樹であることが分った。はるか頭上の、あまり高くて目測も効かないようなところに、青空の小さな斑を背景にして陽光に輝いている樹々の尖端が見えた。

森の床をうねうねと這う霧の雲が、あいかわらず視界を塞いでいた。その霧が静かに過ぎてゆくさまは、まるで樹々のあいだを漂う亡霊のように見えた。下に落ちた葉は朽ちていて、重い露玉がときおりぼとりと頭に弾ねた。

かれはそこに横たわったままだった。前日の出来ごとを思い返そうと努めながら。かれの脳は睡みに耽り、しかも混濁していた。なにか恐ろしいことが起っていたのに、それが何であつたかを長いこと思いだせなかった……それから突然、サント段丘で黄昏に

展開したあの恐るべき最終場面が、目の前にあらわれた——叩きつぶされ血にまみれたスパーデビルの死体と、タイドミンの断末魔……かれは心底からちり毛立ち、悪寒を感じた。

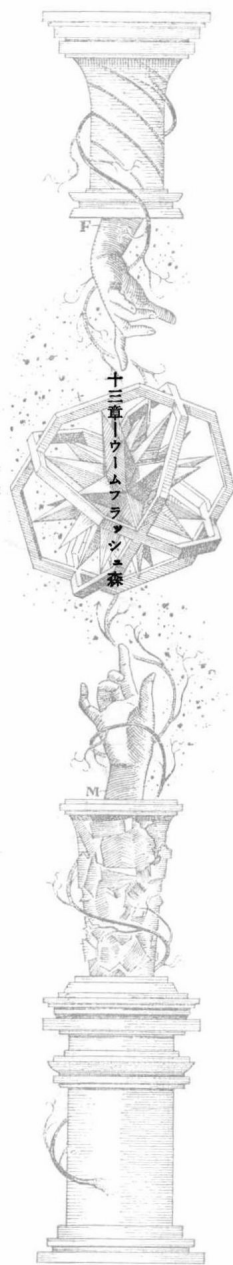
この野蛮な殺人を彩った奇妙な教訓めいた色合いは、夜のあいだにすっかり消えて、今はかれが手を下した事実の恐ろしさをまざまざと感じるばかりだった！……昨日一日のあいだ、かれは強力な魔法にかけられて動きまわっていたようだった。はじめはオシアクスがかれを虜にし、それからタイドミンと来て、次にスパーデビル、そして最後はカティスだ。かれらは力づくで、殺人や暴行をかれにやらせた……そんなこととは夢にも思わないで、かれは自分が自由で天啓を得た異星人として旅していると信じこんできた……この悪夢の旅は何のためだったろう……そして旅は、この調子ですつと続くのだろうか？……

森林はシンと鎮まりかえって、自分の血管を流れる血の脈動を除いて、もの音ひとつ聞えなかった。

かれは顔に手をやり、残っていたブローブが消え、もと通り三つの目を持っている自分に気づいた。第三の目は額についていたが、そこは古いソーブがあった場所だった。かれにはその使いかたが分らなかった。まだ第三の腕はついたままだったが、神経は麻痺していた。

今かれは、もう長いこと、カティスが最後に言った名前を思い出そうと空しくあがきながら、頭をひねりつつづけていた。

かれは旅を再開するつもりで立ち上がった。これといった旅仕度もなく、用意するような食糧もなかった。森は途方もない場所だ





った。すぐ手近にある樹も、かれには、周囲が少なくとも百フィートはあるように思われた。ほかの小暗い大枝もおなじように大きくみえた。しかしその光景をとてつもなく巨大に見せているのは、樹と樹のあいだの途方もない間隔だった。それはまるで、死後の世界にある巨大でこの世のものとも思われぬ大広間のようだった。いちばん低い位置にある枝でも、地上から五十フィートの高さは優にあった。下生えはない。地面を覆っているのは、朽ちて湿った木の葉だけだ。かれは行くべき方向を見定めようとして、あたりを眺めまわした。しかし昨日下ってきたサントの崖は見あたらなかった——どこを見ても似たような道に思えて、どちらへ進めばいいのか判断がつかなかった。かれは恐ろしくなって自問した。首をうしろに倒し、視線を上に向けて、太陽の方角から位置を知ろうとした。でもそれはできなかった。

そこに立って不安と躊躇とに襲われているあいだ、太鼓の音が聞えていた。リズムミカルな打音が、どこか遠くから響いてきた。目に見えない鼓手が、ここからは遠いところにいて、森のあいだを行進しているかのようだった。

「サーター！」かれは喘ぎながら言った。次の瞬間、かれはその名を口にした自分自身に度胆を抜かれた。あの神秘的な存在のことが、いまだかつてかれの心に浮かんだ経験はなかったし、その存在と太鼓の音とのあいだにも、抜き差しならない関係なぞある筈がなかった。

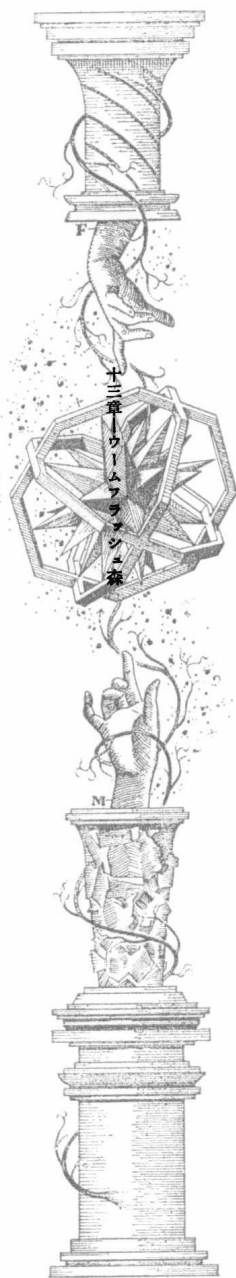
かれは頭を整理しはじめた……しかし、そうしているあいだに、音が遠くなっていっていった。かれは弾かれたように、音のする方角に

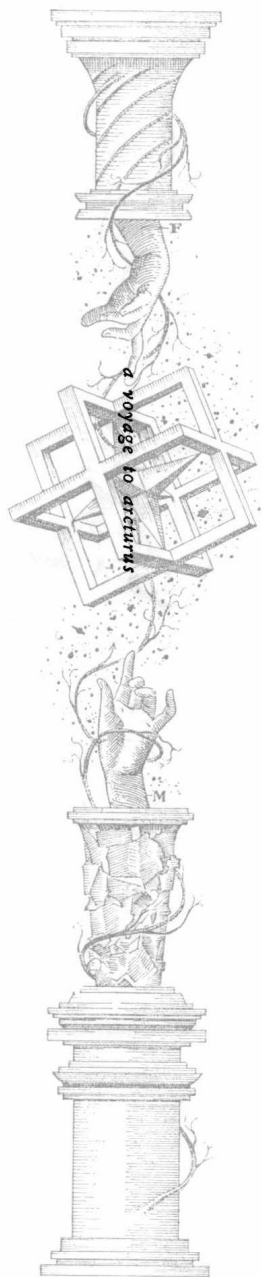
向かつて歩きだした。太鼓の音は實際奇妙だった——耳慣れない不思議な音ではあったが、そこには畏怖を感じさせる色合いこそなかったけれど、その反面で、かれが根っから慣れ親しんだ場所と生活のことを、ふと思ひ出させるのだった。そうした思いが、かれの受け取るそれ以外の心象すべてを、またま、いいものめかしく感じさせるきっかけを与えた。

音は断続的に聞えた。一分つづくこともあれば五分つづくこともあり、それからまた十五分以上も途絶えたりした。マスカルは極力その音の方角を辿っていきこうと努めた。音の源をみつつけようとして、巨大な、ぼんやりと霞んだ樹々のあいだを必死に歩いた。しかしいつも一定の距離はせばまらなかった。やがて森は下り坂に変わった。勾配はおおむねゆるやかだった——十フィート行くと一フィート低くなる程度だった——が、場所によつてはもつと険しいところもあり、また別の場所では実質的に水平な地面が長ながと拡がっているとこももあった。

大きな沼地がいくつもあって、そこを抜けるのにマスカルは水を跳ねあげて進まなければならなかった……かれにすれば、どんなに濡れそぼとうとも、そんなことは問題ではなかった——ただ、太鼓を叩く人の姿を一目でも見ることができれば、どんなに、マイル、一マイルと進むのに、音に近づいているとは思えなかった。

森の暗さがかれの魂にまで浸みこんだ。投げやりな気分になり、疲労を感じ、心が荒んだ。しばらく太鼓の音が聞えなかった。もうこの辺で追跡はよそう、と思ひかけていた。





巨大な、石柱のような樹の幹を回ったところで、むこう側に立っていた一人の男と危うくぶつかりそうになった。男は休息でもとるように、片手を樹にかけて寄りかかっていた。もう一方の手を杖に乗せている。マスカルは急に立ち停まって、男をみつめた。ほとんど裸のいでたちで、頑丈な肉体の持ち主だった。頭ひとつ分、マスカルよりも背が高い。顔と体がわずかに螢光を帯びていた。その眼は——数にして三つあった——薄い緑色をして光沢をもち、ランプのように輝いていた。皮膚に毛はなかったが、頭部には濃くて黒い髪が捲き毛となって伸びていて、それを女の髪のように束ねてあった。かれの表情はあくまでも穏やかだが、内には秘めた恐るべきエネルギーがすぐその下に潜んでいるように見えた。

マスカルは男に問いかけた。「太鼓を叩いていたのは、あなたなのか？」

男はかぶりを振った。

「あなたの名は？」

かれは、奇妙な、調子を抑えた不自然な声で答えた。マスカルは、男が言った名をヘドリームシンター・*1と理解した。

「あの太鼓の音は何なのか？」

「サーターだ」と、ドリームシンターは言った。

「わたしはあの音のあとを追ったほうがいいのだろうか？」

「なぜ？」

「おそらく、かれがわたしを望んでいるのだ。かれはわたしを、地球からここに連れてきた」

ドリームシンターはかれを掴んで腰をかがめ、じつと顔を覗きこんだ。「おまえではない、ナイトスポアをだ」

この星に到着して以来、ナイトスポアの名を耳にしたのはこれが初めてだった。自分がそこですっかり質問に詰ってしまったことを知って、かれは驚きを感じた。

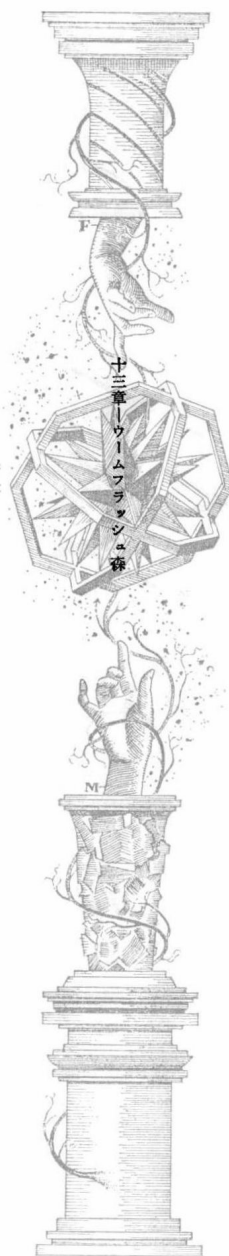
「これを食え」 ドリームシンターは言った。

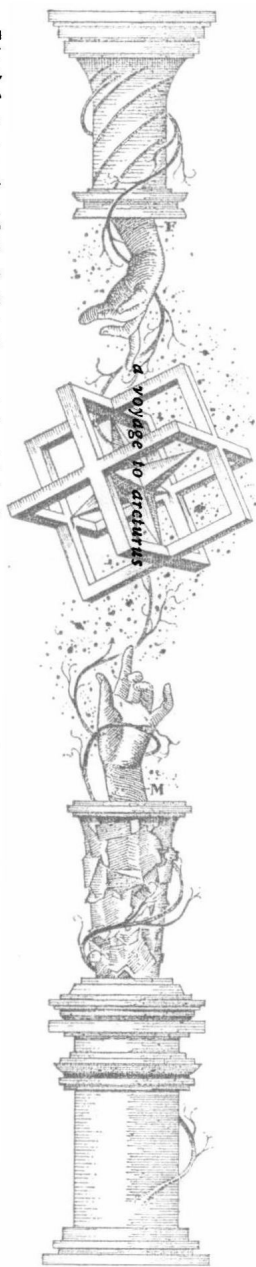
「そのあとで一緒に音を追いかけてよう」 かれは地上から何かを拾いあげ、それをマスカルに手渡した。はつきりとは見えなかったが、手の感触では、丸くて固い木の実のようで、拳ほどの大きさがあった。

「これは割れない」

ドリームシンターはそれを両の手のひらに取って、粉ごなに砕いた。そのあとマスカルは中の果肉をすこし口に運んだが、とても食えたものではなかった。

＊ 11 Dreamsinter = dream (夢) + sinter (湯の華)





「それからもうひとつ、わたしはトーマンスで何をしようとしているのだろうか？」かれは尋ねた。

「おまえは〈マスベル火〉を盗んで、より深遠な生を人々にもたらすために来たのだ——おまえの魂があゝの火に堪えられるかどうかを疑うこともなしにな」

マスカルは、その複雑な言葉の意味をほとんど解きあかせなかった。

「マスベル……それは、わたしがここで目を醒ましてからずっと思い出そうとしていた名だ」

ドリームシンターは急に顔をそむけ、何かに聞き耳をたてるような素振りをした。かれはマスカルに向かって、静かにするように手で合図した。

「太鼓の音なのか？」

「黙れ！ 聞えてくるぞ」

かれは森の上方に眼をやった。今はすっかり聞き慣れたドラムの旋律が聞えてくる——今回は行進する軍隊の足音まで一緒だった。一列になった三人の男が、おたがいに一ヤードかそこらの短い間を措き、樹々のあいだを行進してこちらへ近づいてくるのを、マスカルは見た。かれらは足早に下り坂を進み、右や左を脇見することもない。そろって裸だった。森の黒いひろがりやを背景にして、かれらの姿は淡くこの世ならぬ光——緑色をして不気味な感じだ——に輝いている。かれらが二十フィートほど前方に面と